

## 討論論文 2.

## 生涯発達論についてのいくつかの論点

小 嶋 秀 夫

## 1 生涯発達のゴール

「生涯発達」を論じるときに、人が「発達」ということばに込める意味は同じではない。もし「人間は死に至るまで発達する」（高橋）、あるいは「人間が一生にわたって発達しつづける」（堀）ということばを額面通りに受け止めると、「生きること即発達」と規定しない限り、現在の人口学的状況の中では大多数の人は老人に至って死ぬのであるから、老人が発達の頂点に位置づけられることになる。発達のゴールとしての老人の在り方として複数箇の状態を措定し、またそこに至るルートも複線であることを認めるにしても、そこでは老人が何らかの意味で完全に近い存在だとされることになる。堀のいう第3のモデルもそれに属する。もともと、身体的側面に衰えがあるにしても、知的、道徳的・人格的、あるいは宗教的に優れた人間存在としての老人像は、いくつもの文化で存在していたとされている。現実にはそれを実現した人がどれだけいたかは別にして、理想型としての老人像が、発達のゴールとして人々の生活の中で現実に機能していたことは十分に考えられる。

そのようなゴールの設定法は、今日でも完全に消滅してはいないだろう。しかし、現在の社会も、またその中で活動する発達研究者も、通常はそのような考え方をしない。したがって、上記の表現を、その文字通りの意味にではなくて、「人間はその生涯にわたって発達可能な存在である」と受け止めるのが、一般的だといえる。それでよいのか、あるいはやはり老いと死に至る人生の歩みを、個人的あるいは社会的にプラスのものとして意味づけるのかが、1つの分かれ目である。この問題は、エイジングをどのように意味づけるかと密接に関係している。

## 2 エイジングの意味づけ方

**3通りの意味づけ方** エイジングを個体の年齢的变化に適用するときには、大別して3通りの使い方が認められる。1つは年齢に伴う老化・衰退・退行というマイナスの意味が強いものである（堀のいう第1のモデルに近い）。2つ目は、良し悪しの判断を交えないで、年齢に伴う変化を現象的に記述しようとするもので、加齢現象と呼ばれることもある。それ自体が生涯発達のコースを表しているのではないことは、高橋のいう通りである。そして3つ目にはプラスの意味を込めて、熟成した状態への変化を指す場合がある。生涯にわたって人間の発達可能性を認める考えは、エイジングの第3の意味づけなくしては成り立ちにくい。

エイジングに関するこの3つの意味づけの仕方は、実証的データがどれを支持するかという問題（empirical question）ではなく、どのような立場で現象をとらえるかという視点の違いによるものである。このような筆者のとらえ方は、堀がかれの表1のモデルについて、「……便宜上3つの立場に分けたが、実際の人間の発達には、これらの立場が混在して展開するといえる」と述べているのとは異なった見解である。

**意味づけの背景** さて、エイジングに関する意味づけの違いは、どのような背景から出てきたのであろうか。エイジングについての第1の意味づけが、堀もいうように生物学的発達観を基礎にしていることは確かであろう。個体は特定の目標に向かって発達する存在であるという生物学的発達観は、もともと19世紀後半の西欧に現れたものであった。それによって、人間の身体的成長だけではなく知的発達に関しても、その発達の頂点が今日の区分による青年期の前半のうちに置かれたのは当然であったし、医学の

領域では今日でもそう考える人が多いようである。心理学的発達研究は青年期までで終わり、それ以降の変化は、それに学習という概念を適用するにしても、発達とは考えない人が大部分であった。心理学でも、ピアジェやフロイトの理論に代表されるように、発達の段階理論は成人期以降をほとんど問題にしなかった。例外は、フロイトの理論を継承・発展させたエリクソンの理論で、その中には上記のエイジングの第3の見方が明確にある。生物学的発達観を基礎としながらも、パーソナリティ全体の発達と、社会的・文化的条件への関心が強いエリクソンの理論の特徴がそれと関連している。

中年から老年にかけての心理学的機能の年齢的变化についての関心の高まりは、これまでかなりのデータの蓄積を生み出した。しかしその多くは、上記の第1または第2の意味づけによるものであった。唯一の正答が確定した複雑な問題に対して、どれだけ速く正答できるかの年齢比較をすると、知的能力は青年期から初期成人期にピークに達するという研究結果が多い。この種の年齢関数は、どのような内容・形式の検査を用いるかによって違いが出てくるので一概にはいえないが、反応速度を重視した知的能力の量的側面が、成人期のうちに低下を始めるのは事実であろう。そのような機能を測って年齢比較をすると、たとえ縦断的データによっても、成人期後半以降の変化に、たんなる水準の維持を越えたプラスの意味を見出しにくくなるのは当然である。

このような結果に、年齢に伴う生物学的条件の変化が関係しているのは確かであろうが、それ以外の条件も無視できない。たとえば、本人が興味を失ったり環境からの要請がないために日頃使わなくなった機能は、だんだんと錆びついてくる。このような場合には、現実に示している水準よりも高い潜在的な有能性を個体が備えている可能性がある。比較的最近の研究に中高年者に対する訓練効果を扱ったものがあるが（例：Schaie & Willis, 1986）、そこで問題にされた機能は、従来の知能検査や記憶課題がカバーするものであった。

それに加えるに、感覚運動的反応の速度が衰えたとしても、それを補う別の機能を使用することによって、成績の低下を防ぐという補償的变化が、中年から老年のタイプストに起こっているという報告がある（Salthouse, 1987）。それは反応時間が遅くなってきてもタイピングの成績を落とさないための対処法（先読み文字数を増やす）をとるようになったことによるものと推測されており、たとえ成績の向上はないにしても、そのような対処法の発展は発達の变化とみなせる。この種の補償的变化の過程は、人生の初期からのいろんな段階で起こっている可能性がある。

補償的变化という考え方では、人間がもつ特定の機能を取り上げて、「有能であるのはよいことだ」とする前提は変えていない。しかし実際には、経験から得た工夫によって補っても老練の競技者や演奏家が若手に凌がれるのと同じように、心理学的機能に関しても補償的变化の可能性は無限ではなく、いずれは有能性が低下し始める。特定の機能に注目して比較する限り、いつかは下降的变化が起こるとせざるをえない。また子どもでも、発達のコースがジグザグになったり遠回りしたり、あるいは立ち止まったりしていると、それは発達の停滞だという評価を招くことになる。

さて、エイジングの第3の意味づけに関連して、近世日本の医師、香月牛山（かづき・ござん）の指摘は注目に値する。近世の日本では、中国の医学思想の影響もあって、人は数え年の四十歳頃から血気が衰え始め、だんだんと老人の域に近づき始めると考えることが多かった。これはまさに、生物学的視点である。しかし、牛山は、初老（四十歳）・中年（五十歳）と経るにつれて、人はそれまでには見られなかったような知識獲得や技能の進展、あるいは誤りからの解放が可能になるとして、エイジングの積極的意義を述べた。

『老人必用養草』（1716年）の中での牛山のこの主張は、まさに経験を通して円熟して行く知恵を重視したものである。人間の生活にとって知恵が重要な意味をもつことは、以前によく使われた「智慧」が仏教用語であったことから分かるように、仏教・儒教の教典や旧約聖書にも見られ、古くから認識されていたものと思われる。中年・老年の蓄積された知恵を尊重するには、複雑ではあるが基本的に安定した社会組織が形成されているとともに、他方で社会が常に新しい課題を抱えているという状況が

関係したのであろう。上記の牛山は、若い者と（当時の）40歳以後のものとの適材配置の考えを提起しており、それは年齢に伴う社会の中での人間の役割の変化と関係したものである（堀の第2のモデル）。

高橋も言及しているように、最近のBaltesたちの研究は、ようやく上記のような知恵の実質的内容を、部分的にはあるが（知識に重点を置いている）扱い始めている（Smith and Baltes, 1990など）。それによると、一般的に言って老人だけが人生の選択に関する知恵ある判断をするのではない。しかし、少なくとも老年期に起こる事態についての決定に関しては、老年の被験者が質の高い反応を示し、Baltesらの定義する意味での知恵は、人生の経験と関係することが示唆された。

知恵の働きが重要だという社会の認識は、それを中年以降に求めるだけにはとどまらせなかった。たとえば、近世の日本では、とくに18世紀になると、今日の育児書と教育書とを合わせたような内容をもつさまざまな子育ての書が現れた。その中でよく使われた言葉の1つが「才智」であり、それは、鋭く優れた頭の働きを表す「才」と、物事の理を究り善悪を区別して行動の指針を与える実践的知識を表す「知恵」を対にして示したものであった。才と知恵とはお互いに深く結びついたものではあるが、2つは区別され、才気走った子どもを賢い子どもだとして喜ぶのではなくて、知恵をたっぷり育てることが大切だという考えも実際に出ている（大原幽学『微味幽玄考』, 1858年頃）。これはまさに高橋のいう生涯発達の視点といえる。

これは、「有能なことはよいことだ」という視点にとどまってははいない。それは、人間としての機能の全体的まとまりに注目するという視点である。しかしその評価の基準は、明らかに個人にではなくて社会に置かれている。これは近世という時代的背景からして当然であるし、またその視点は、現代においても無視することはできない。しかしその中であっても、個体の統合性に目を向けることの重要性が明確に意識されていることは注目に値する。

もはや強くもなく華やかさもなく、そのうえ正確さも失った競技者・演奏家であっても、独自のまとまりをもった演技で観客に何か訴えるかも知れない。またもし自分の衰えの自覚や周囲の人々との葛藤を経て知的・人格的に子ども返りした老人（「老いて再び稚児となる」）が、その水準で安定した心理的内界と対人関係を維持できるようになったのだとすれば、それを発達的变化というかどうかは別として、積極的な意味をもつ適応的变化といえるのではないか。また、定められた目標に向けての進歩を急がせる親・教師・社会の視点からは、「退行」・「問題行動」・「不適応」などとされる子どもの行動や状態も、人間としての統合性を確保しようとする子どもの努力の表われなのかも知れない。

### 3 発達のストーリーの語り手

上記のような考察から、誰がとらえた発達であるかの問題が浮かび上がってくる。発達にしるエイジングにしる、それは直接に観察できる事象ではなく、個体の時系列的变化を体系的にとらえて意味づけるための構成概念である。発達のストーリーは事後にまとめられるものとは限らず、同時進行的に、そして時には予期的にも適用される意味づけのシステムなのである。それは人生の時刻表または発達の時刻表として、人々の生活の中でも重要な機能を果たしている。

高橋の使った「ストーリー」の意味を、筆者は最初、研究者が語るそれと読んでいた。ところが、論文の終わり近くになって、個体自身によるそれも含めて考えられているらしいと気づいた。彼女のいう「人間関係についての異なるストーリーあるいは「理論」」は、発達のストーリー自体ではない。そのことは内的作業モデルについても同様である。しかし、生涯発達の概念は、生活し発達する主体としての個体が、自分の辿る発達の道筋についてどのようなストーリーを構成し、それが個体発達の過程でどのような機能を果たし、またそのストーリーがどのように変わって行くのかという興味深い問いを投げかける。筆者もそのような概念を立て、それを調べる方法を探索しているところである。

次に、梶田の提起した図式自体は、以前から家族社会学などの領域で述べられてきた家族のライフ・サイクル論と異ならない。またそれは、家族システムの発達段階とその発達課題に関するこれまでの提

案や、エリクソンの理論によるアイデンティティのらせん式発達のモデル（岡本，1990）と結果的によく似たものとなっている。問題は、「実存的存在」と規定される生活と経験の様式の中身である。ドイツのある研究（Dittmann-Kohli, 1990）は、老年の実存的制約の中で、個体に自己と人生に関する意味の再体制化が起こりえることを示唆している。そこでは、自分の基準を変え、自己に対してより受容的となり、そしてすでに与えられたものとまだ入手可能なものを以前より高く評価するようになるという認知的-感情的ストラテジーを通して、プラスの意味の生成が起きているのだとされている。

現在の日本の文化の中での実存的存在の中身をどのように考えるのかを、梶田は明らかにする必要があるだろう。筆者が連想したのは、ヒンドゥーの教典の人生の4時期（藤，1963）である。それは①梵行期または学生期（教典を学ぶ）、②家住期（結婚・子育て・先祖をまつ）、③林棲期（森林に隠棲する）、④遊行期（巡礼となって死を待つ）で、系列自体は、①と②とがそれぞれ梶田のⅠとⅡとに、そして③と④が梶田のⅢ（ただし、死を待つことは直接には含まれていない）というふうに、対応が認められる。現在の日本でのⅠの時期が古典的ヒンドゥーの教典の①よりもずっと延長されているのは当然である。また、社会的責任を果たした後で、林棲と遊行の形で自己実現を図ろうとする人がわれわれの周囲にほとんど見られないのも事実である。それでも、両者の系列の類似性は明らかで、この問題はもっと広い歴史的・文化的視点から検討される必要がある。

なお、今回寄せられた4論文のうちで、生涯発達の枠組みの中での教育の役割に直接言及したのは、成人教育についての堀のそれのみであった。生涯発達の中での生涯教育・生涯学習の位置づけに関しては、心理学からの踏み込んだ論議が必要である。

#### 4 社会的変化と個体の発達

これまでに触れてきた研究は、人間の発達の姿に時代や文化による違いを認めるにしても、基本的には個体発達あるいはライフ・サイクル論のカテゴリーに属し、個体の発達過程と歴史的時間との相互関係を直接には問題にしていない。1970年代からのエルダーたちによるライフ・コース研究の枠組は、その問題を本格的にとらえたものである。社会的・経済的・政治的な変動の大きい時代の中で変化し続ける個体や家族を、どのように研究するかという問題意識が、その基礎にあった。

今回のエルダーの論文は、すでに単行本、単行本の章、あるいは学術論文の形で発表されてきたことのエッセンスを、簡潔にまとめたものである。筆者が以前に述べたことであるが、大恐慌を経験したオクラホマの子どもたち（その当時、かれらは児童期半ばにさしかかっていた）のストーリーは、そのままでは現在の子どもには当てはまらないであろう。当時のアメリカでは、家族も地域社会も、現在よりはよく機能していたと考えられるからである（小嶋，1981）。さらに、ヴェトナムからの帰還兵の問題や湾岸戦争から帰還して職のないマイノリティーズの問題、そして、戦争体験の影響の日米差（Elder & Meguro, 1987など）などに関する情報は、大恐慌の子どもたちのその後の人生にとって軍隊経験がプラスに働く面があったのも、そのコホートに特有なアメリカ社会の歴史的条件が関係していたという感を深くさせる。

さらに、このコホートの後の心理学的評価に関しても、時代の価値観の影響が窺われる。たとえば、大恐慌に遭遇して収入が激減した家族の女兒は、そうでない家族の女兒よりも家事に参加する率がずっと高く、また後に家庭志向が高まった。われわれの多くもこのような児童期の家事参加や後の家庭志向にプラスの評価を与えるであろうが、大戦後のアメリカで女性の伝統的性役割への回帰が認められたように、その価値自体も時代の社会的・文化的な条件の影響を受けているという相対的な認識をもつことが健全であろう。

また、社会的・経済的变化に由来するストレスにさらされた家族が、それに十分な対処ができないとすれば、家族関係や親による子育てに問題が生じ、それが子どもの生活と発達に影響するのであるが、それには子どもの年齢・性別・個人的特徴が絡み合っている可能性を、エルダーたちの一連の研究は強

く示唆している。これは、過去の研究結果の再解釈と今後の研究計画にとって貴重な示唆であるだけでなく、人間の発達過程についてのわれわれの視点を拡張するものである。

そのような視点は、独自の理論的枠組みと訓練とをもった研究者が、良質のデータと研究機会に出会うことによって、初めて現実のものとなる。かつてわれわれの教室では、1970年代前半を中心に過疎の研究（代表者：故 統 有恒教授）が行われた。それからおよそ20年を経た今、その研究の展開が可能かの検討が待たれている。

個人のライフ・コースに与える社会的変動の影響がその人の年齢によって異なることは、わが国の社会学者たちの研究によっても明らかにされ始めている（例：森岡・青井, 1987）。その影響過程は複雑なものであるが、発達のコースの研究にとっての重要な課題が提起されたことになる。

最後に、社会のシステムと個体の発達・エイジングとの関係に触れておく。発達のコースの記述（発達の指標の年齢的变化についての記述的データの収集）は、発達研究の主要な課題の1つである。それに取り組むとき、多くの発達研究者は発達現象とその研究の背景で働く社会のシステムの働きを視野に入れていない。

しかし、個体が通常どの時期にどのようなことができるのか、どのような特徴を示すのか、どのような役割を果たしえるのか、どのような訓練が可能かなどについての期待と、それに応じた個人に対する評価とは、社会通念として社会の成員に共有されている。そしてその通念と関連して、その時期に達した成員をどのように処遇するかが、慣習や法律によっておおまかに定められている。その標準は、一方では個体の経験内容を直接的・間接的に規定する。逆に社会の中での個体の発達とエイジングの姿は、社会通念と処遇にも反映される。したがって長期的に見ると、社会システムと個体の発達・エイジングとは、あい関連しながら徐々に変化すると考えられる（小嶋, 1990）。

発達研究自体も、上記の大きなサイクル中に位置づけられる（図1）。この図は、発達研究者が記述の対象とする現象が、社会システムの長期的影響を受けたものであるだけでなく、現象をとらえる枠組み自体が社会システムに強く規定されたものであることを示している。さらに、発達研究者が得た知見が、徐々に社会に還元されて社会システムの変化につながることは、ここ4半世紀の乳幼児研究や最近の老年研究を見ても明らかである。しかしまた、研究者がどのような枠組みで研究をしようと

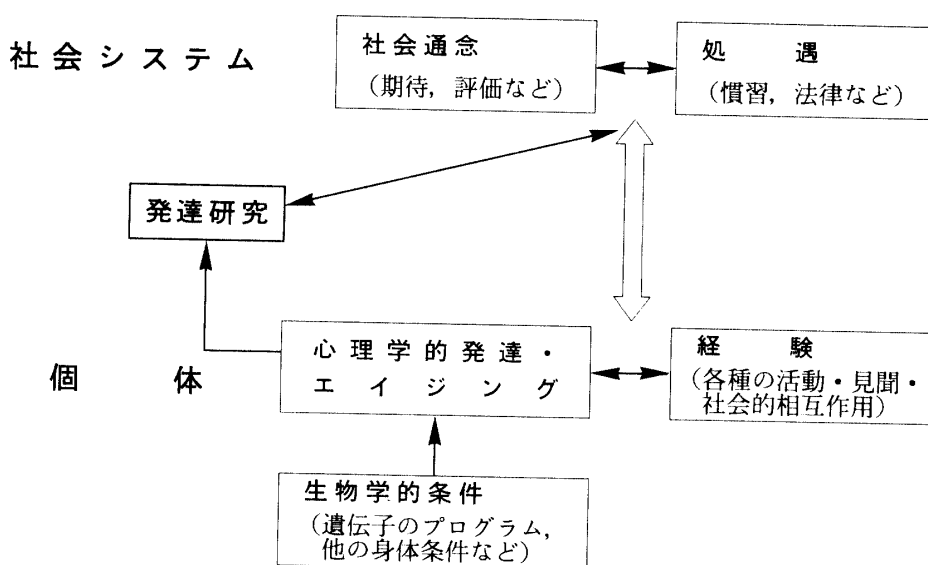


図1 個体の年齢的变化についての社会システムと、個体の心理学的発達・エイジングとの相互関係の図式（小嶋 児童心理学への招待 サイエンス社, 1991 から）

するのか、また、その結果が学界や社会に受容されるのかには、時代の諸条件と時代精神とが強くかかわっているはずである。生涯発達と教育の問題に取り組もうとする人には、そのような仕組みへの洞察が要請される。

#### 引用文献

- Dittmann-Kohli, F. 1990 The construction of meaning in old age : Possibilities and constraints. *Aging and Society*, 10, 279-294.
- Elder, G. H., Jr. and Meguro, Y. 1987 Wartime in men's lives : A comparative study of American and Japanese cohorts. *International Journal of Behavioral Development*, 1987, 10, 439-466.
- 藤 謙敬 1963 インド教育思想史研究 講談社
- 小嶋秀夫 (監訳) 1981 家族の変貌と子ども (現代児童心理学2) 金子書房
- 小嶋秀夫 1990 児童発達観と心理学 児童心理学の進歩, 29, 215-236.
- 森岡清美・青井和夫 (編) 1987 日本人のライフ・コース 日本学術振興会
- 岡本祐子 1990 自己実現をめぐる小川捷之ほか (編) 臨床心理学体系第3巻 金子書房  
Pp. 193-214.
- Salthouse, T. A. 1987 Age, experience, and compensation. In C. Schooler and K. W. Schaie (Eds.), *Cognitive functioning and social structure over the life-course*. Ablex. Pp. 142-175.
- Schaie, K. W., and Willis, S. L. 1986 Can decline in adult intellectual functioning be reversed? *Developmental Psychology*, 22, 223-232.
- Smith, J., and Baltes, P. B. 1990 Wisdom-related knowledge : Age/cohort differences in response to life-planning problems. *Developmental Psychology*, 26, 494-505.

(1991年10月9日)